カール・バルト説教「囚われ人に解放を」

四つの言葉⇒聖書の言葉　説教者の言葉　聴き手の言葉　神の名による言葉

鍵になる言葉⇒**回心**　　空間をイメージさせる言葉

愛する兄弟姉妹たち!

あなたがたはみな確かに生涯に何度かは「**回心**」という言葉を聴いたことがあるでしょう。**回心**とは立ち返りのことであり、一人の人の生涯における新しい始まり、別の、よりよい道の始まりを意味します。**回心**――これについてすべての時代のキリスト者の間で多くのことが熟考され、多くのことが語られてきました。おそらくあなたがたのだれかれがあるときだれかからこう言われたこともあったことでしょう。あなたが本当に必要としていることは、あなたが**回心**することです、と。そうです、これこそ私たちみなが必要としているものです。私たちが**回心**することが、ほかのなによりも必要なのです。一度だけではありません。本来毎日繰り返してです。マルティン・ルターはかつてこう言いました。「キリスト者の生涯は日毎の悔い改めでなければならない」と。悔い改め、これは繰り返しますが、**回心**なのです。

私たちがこれを正しく理解すると、私たちが先に聴いたみことばの中にも**回心**について語られているのです。そこにあり、私たちがそこで愛とについて聴いたすべてのことは結局は、私たちが**回心**してよいし、またしなければならないのだというところに向かっています。しかしいずれにせよこれはこのみことばの中では隠されていて、言い習わしているとおり、行間にあるのです。ですから私は結びのところで再びこれに戻りたいと思います。私たちは今は先ず、はっきり現れていることに留まりましょう。

「は愛の内にはない」とあります。愛の内なのです。これは注目すべきことではないでしょうか。愛の内なのです。愛が、人がおり、住み、座り、立ち、歩くことのできる場所、空間、家のようです。聖書にはほかにも似たような表現があります。折に触れて、信仰の内に、霊の内に、主の内に、キリストの内にと言われているのを読むことができます。そのときにはいずれにせよ、今愛について「愛の内に」と言われているのと同じ家のことが言われているわけです。私たちはこれを今日は「愛の内に」という側面から注目することにしましょう。

さて私たちはこう聴くのです。この家には家の秩序があるのです――それがなんであるか分かりますね。この家の秩序の最初の文章、いわば第一条は「は愛の内にはない」なのです。別の言葉で言えば、はこの家には見当たらない、閉め出されている、ということです。電車の中に「禁煙」と書かれていたり、工事現場に「部外者立ち入り禁止」と書かれていたりするのを考えるかもしれません。しかし私たちがここで聞いているのは、単に禁止だけではありません。は愛の内にない、全く存在しない、と言われているのです。しばしば必要

なことですが、しっかり風通しをすれば、部屋の中の悪い空気が追い出されるように、愛が憎しみを追い出しています。あるいはもっと美しいイメージを使えば、劇場で幕が上がれば、あるいはコンサートで音楽が始まれば、人々のおしゃべりが止むようなものです。よい文章ではありませんか。よい家のよい秩序の第一条なのです。

私たちがそこで言われていることを理解しようと思えば、いっときこれをじっくり考えてみなくてはなりません。私たちが愛について、愛として知っていることについて、人間の愛について語るとき、一体本来なにを意味しているのか、考えねばならないのです。これについては語るべきことが一杯あるでしょう。私は今、愛をもって、最善の場合の最善の場合と強調しておきましょう――人間的愛をもってなにが意味されうるかだけを表現するよう試みます。愛、それは人間の間の、多分二人の人間、あるいは三人、あるいはもっと多く、あるいは人間のグループの間での関係でありましょう。それは、そこにあってはこれらの人間がもはや遠くにおらず、見知らぬということなく、もはや無関心でいることも、不愉快でいることもなく、互いに知り合っていて、分かり合い、互いに信頼を置いている関係です。これらの人々がもはやお互いなしにはいたくない、互いに引かれ合っている、一緒にいたいと思うほどに互いが気に入っているのです。こうして彼らは、お互いに自らを差し出して、向き合っているか、一緒に生活しているのです。

これは美しくありませんか。そうです、美しいのですが、本当のこととしては美しすぎるでしょう。そうではありませんか。実際の生活では、私たちみなが常に、ほんの一部分だけ、たまさかにこの愛のほんの少しだけに出会いますが、本当はかなり稀なことで、それも愛であり得、あるべきものとはただほど遠く隔たって、似ているだけのものでしょう。ひどい写真がだれかの肖像を再現しているように、そうだ、多分私かあなたを写しているはずだと、なんとなく認めはするものの、実際とは全く、全くかけ離れているというようなものなのです。

さて確かにこういう人がいることでしょう――私たちの内で一人、そういう人がいるでしょう。あなたが私たちに愛として説明しているものは、私の人生には全く存在しないと言いたいと思っている人です。だれも私を愛してくれない。私もだれも愛したことなどない。説明されたようなものはさておきだ。私は孤独だ、全く孤独だ。人々が互いに離れて、見知らぬ者同士で、一緒になることも、向き合うこともない、愛のない世界で石のように孤独だ、と言う人です。

一つのことだけは全く確かです。この愛、私たちがこの語を口にするとき考えていて、私たちが多分知っているとか知らないと主張する愛――この人間的な愛は憎しみを追い出すことはありません。この愛の家では最善の場合でもこの最善の場合というのがいかに稀なことでしょう――最善の場合でも多くの憎しみが存在するのです。一緒に体験できるような失望に対する憎しみ、互いを失ってしまうのではないかという憎しみ、大きな影のように後ろから私たちの人生に

影をさす自分の過去に対する恐れ、未来に対する恐れ――私たちの前からやって来る別の影――、人々に対する恐れと自分に対する恐れ、運命に対する恐れ、死に対する恐れ、またきっと悪魔に対する恐れです。人間的な愛の家、そこには最善の場合でも恐れの亡霊が住んでいます。それゆえ常に美しい家であれ、郊外菜園の小屋であれ、よい生活が営まれていても、そうなのです。しかし、「恐れは愛の内にはない」と言われている第一条をもった家ではそうではありません。

ここで今私はみなさんがたに全く別の家と全く別の愛について少しお話ししましょう。それは私たちの言葉では「完全な愛」ということです。すなわち、満ち満ちた愛であって、小さな細切れの愛ではありません――息のようにすぐなくなってしまうことがなく、留まっている愛であり、そこになんの恐れもない愛です。そこではあなたがたの内の全く悲しんでいる人々も、また、私はそもそも愛とはなんなのか知らないのだという意見を多分もつ人々も、私に静かに耳を傾けることでしょう。

こういう愛があるのです。これまた関係です。しかし関係という言葉では余りにも弱すぎるでしょう。この愛は契約です。契約というのは確かな、整えられた、解消不可能な事柄です。契約関係に入れば、人はそれを解消することはできず、してはなりません。この契約にいるのはだれでしょう。神がこの契約におられます。主である神、自由な方である神、高い方である神、だれにもなにも負い目のない神、この方なしにはだれもなにも存在しない神です。この神が契約を立て、守られます。そしてそのもう一方の側は――契約には確かに二人が必要です――私たちです。そうです、私たちなのです。神のこの契約は神とあなた、私、私たちとの間に結ばれているのです。

私たちとの契約を欲し、もち、結び、実行するということに神はなぜ、どのようにして至られるのでしょうか。たまたま、私たちが強く、素晴らしく、よい人々だからなのでしょうか。そうではありません。私たちはみなそうではないのです。たまたま、神が私たちを必要とし、なにかの目的のために私たちを用いようとしているからなのでしょうか。いいえ、神は私たちを必要としておられません。たまたま、神と契約するのに、私たちが多分訳の分からない仕方でよくなった、少なくともそう思ったとか、それに価するからでしょうか。否、否、私たちはそれに値しません。よくしようと思ったりも、したりもしていません。神がこの契約を結び、神と私たちの間に打ち立てようとしておられるのは、全くただ、神の自由な、よい、全能の、あわれみ深い、聖なるみこころによるのです。神は価なしにこれをなさいます。「これが愛です。私たちが神を愛したのではなくて、神が私たちを愛してくださったのです」（Iヨハネ四・一〇）。また、「神はその独り子を与えるほどに世を愛してくださった」（ヨハネ三・一六）のです。神のみ子、これは神ご自身にほかなりません。ご自分だけどこか高いところに永遠にただ独り神であろうとは思われず、私たちをも放っておこうとは思われなかった神、かえって私た

ちのところに来てくださった神、私たちと同じようになり、私たちの隣人となり、こうして自ら私たちのように人となり、みどり子としてベツレヘムの飼い葉桶に横たわり、ゴルゴタで十字架につけられた人となられた神です。これこそ完全な愛です。このように神は私たちを知っておられます。このように神は私たちを求めておられます。このように神は私たちを探し、見出してくださいます。このように神は私たちのものであり、私たちは神のものなのです。

これが神の契約です。これが完全な愛、神の愛の家です。そこには恐れがないのです。この愛が恐れを追い払います。このためにこそ神は私たちを愛してくださったし、愛してくださいます。このためにこそ神はその独り子を、その独り子においてご自身を与えてくださいました。こうして私たちはもはや恐れる必要がなくなり、恐れる理由もなくなったのです。神が私たちを愛してくださったことによって、また愛してくださっていることによって、恐れる理由は脇に押しやられ、取り去られ、消し去られ、打ち壊され、無とされました。あの人は私をよく思ってはいないとあなたが思っていたり、あなたに向かって多分ひどい言葉を投げかけたり、あの人はひどいことをするのではないかとあなたが思っていたりする、あの人、この人に対してあなたは恐れることはないのです。一体なぜその人を恐れるのでしょう。この人が神に向かってなにができるでしょうか。その人が神に向かってなにもできないのであれば、神があなたの味方でいてくださる以上、この人はあなたに対してなにができるでしょうか。あなたは本当にだれも恐れる必要はありません。人間になにができるでしょうか(詩編五六・五、一二参照)。――あるいは、あなたが一緒にいて欲しいと思っている人、なくてはならない人だと思っている人がなんらかの理由であなたから離れていってしまいはせぬかと、あなたは恐れているかも知れません。そうでしょう。しかしこの人は神から離れはしません。彼が神から離れないのであれば、その点で彼はあなたから本当に離れてしまうことはないでしょう。こういう理由でも恐れる必要はありません。――あるいは私が先に暗示したように、あなたの過去や未来や死を恐れるかも知れません。そうです。しかしご覧なさい。あなたは自分の過去をもって、自分の未来をもって死の中に入っていくのですが、神に愛されている人としてあなたの死を超えるのです。この亡霊をなぜあなたは恐れようとするのですか。神の完全な愛があなたの全生涯の始めから終わりまで、さらにそれを超えて及んでいるのです。――あるいは、あなたは自分を恐れているのでしょうか。――これが恐れの最強の理由であるように、私には思えます。――あなたは自分自身を、自分の弱さを、多分弱さだけでなく悪さを恐れているのでしょう。あなたに向かって強くなる、しばしば強くなりすぎる誘惑をあなたは恐れているのでしょう。あなたは頭の中に思いつきそうなふとした思いとか、ふと忍び込む小悪魔を恐れているのでしょう。止めてください。こうした理由も数に入りません。神はあなたの心より大きいのです(Iヨハネ三二〇参照)。あなたが恐れるかもしれない、恐れねばならない、あなたの内にあるあらゆるものよりも神は強力なのです。神がより強力であって、こうしたものに立ち向かってく

ださるのであれば、なぜあなたはあなた自身の中にも巣食っているこの悪い世界全体に今ひとたび逆らうことを始めないのですか。神が先ずこの世界に逆らってくださいます。あなたはこれに続きなさい。同じようにしなさい。あなたにはできます。あなたは自分を恐れる必要はないのです。――あるいはあなたは悪魔を恐れようと思いますか。既にたくさん悪魔は笑い者になっています。でも実際は多くの、多くの人々が心の底で悪魔を恐れています。私はこれについてはただ短く言っておきましょう。神のみ子は、悪魔のわざを打ち砕くために到来なさったのです(Iヨハネ三・八)。み子はこれを打ち砕かれました。今私たちはこれが打ち砕かれたままにしておきましょう。

恐れる理由がほかにもあるでしょうか。きっとまだたくさんあることでしょう。しかし完全な愛の家に場所をもち、そこで成り立つような理由は一つもありません。私たちがなにかに、だれかにもつような恐れ、愛によって、この完全な愛によって追い出されないようなどんな恐れもありません。ピリオド、終止符です。そうなのです。

そうなのです。でもあなたがたの内のあれこれの人は多分考えているでしょう。これはみな美しくて、本当だ。今はこう聞いておこう。日曜の朝だし、教会にいるのだから。この家が、この完全な愛がどうだというのだ。一体私がその中にいるだって。それでも、さっき言われたように、これで終わりと言われたって、私は恐れているんだ。あれやこれやを昼も夜も恐れている。恐れているからこそ、私は恐れのない家、完全な愛の中にはいないのだ。どこか外に、危険で、なにかが走って来て轢いていこうとする路上に、道路の真ん中に右や左を見ながら立っているのだ、と。**回心**しない人はこう考え、こう語ります。

今先に進んで考え、語れば、すべてはもっと悪くなります。その中にいるなんて、素晴らしかろうぜ。俺だって愛の中にいて、恐れる必要がないのがいい。今どうすれば確かにそこに入っていけるのかなあ。壁を乗り越えるのか、多分窓を打ち壊すのかな。中に入るって、どんな技が、どんな緊張が、どんな努力が要ることだろう。そうすればもう恐れることはないのだ、と。

今私はもう一度言わなくてはなりません。全く真剣に言わなくてはなりません。**回心**しない人はこう考え、こう語る、と。愛する兄弟姉妹方、私たちが完全な愛のこの家に自分たちで入っていく、乗り越えたり、忍び込んだりするのが重要なのではなくて、神のこの完全な愛が私たちのところにやって来るというのが重要だからです。私たちのためにおられる救い主がいてくださるということが重要なのです。――「私が彼のことを思うよりも先に、彼が私を心から受け入れてくださった」のです。――神がすべての人間のために天に建ててくださった家が重要なのです。神はその家を私たちの貧しい、暗い地上に下らせて、そこここにお建てになり、私たちみながこの家以外のどこにもいなくてよいようにしてくださったのです。

そうです。私たちが今やもう恐れなくてよいと言うならば、なにが欠けているでしょうか。欠けているのは、単純に欠けているのは、私たちが今なおもって自分がどこにいるのか気付いていないということです。**回心**していない人の行動、努力、考え、言葉はなにが起こっているのか気付いていない、彼が外にではなくて、中にいることに気付いていないところから来ます。眠っているから気付いていないのです。眠りの中で彼は夢見ているのです。彼は夢見て、まさにその夢が誤りであり続けているという点で、誤っているのです。彼は、自分がまだ恐れねばならず、恐れることがありうると夢見ています。恐れる理由がまだ本当にあるのだと夢見ています。これが**回心**していない人です。

さて今**回心**とはなんでしょうか。立ち返りとはなんでしょうか。悔い改めとはなんでしょうか。私たちが踏み込んでよく、踏み込まねばならないこの新しい道とはどのようなものでしょうか。愛する友人のみなさん。**回心**とは全く単純に、私たちが目覚めて、恐れる理由は自分たちにあるかのごとくに思っている夢や誤りを自分の後ろに捨て去ることです。目を開いて、生まれたばかりで、初めて見るときの、全く小さい子供のように、自分のいるところを見るのです。外にいるのではありません。技も緊張もなしに完全な愛のただ中にいます。神が先ず私たちを愛してくださって、そこには恐れがない、完全な愛のただ中です。恐れる理由がなく、この愛が恐れを追い払うからです。

聖霊が一人の人の心に語るならば、この人は**回心**し、生まれたばかりの赤ちゃんのように、そこで目を開きます。それゆえ人はこの**回心**を人の生まれかわり、再生と呼びます。そうすれば人は自分がどこにいるのか気付きます。そうすればもはや恐れることはあり得ません。聖霊が彼の心の中へとこれを語るのです。そこでは避けることができません。そこでは、「眠っている者よ、起きなさい。死者の中から立ち上がりなさい。キリストがあなたを照らしてくださいます」と聞くことになります。さらに「恐れるな。私はあなたを贖う。私はあなたを名をもって呼ぶ。あなたは私のものである」とも聞きます。

兄弟姉妹のみなさん、神が私たちにこれを与えてくださいますように。神がこれをあなたに、あなたに、あなたに与え、私にも、私たちみなにも今日、今も明日も、いつも新しく与えてくださいますように。アーメン。